除，腸々吻合術，人工肛門造設術，手術所見では，腹膜播種による小腸狭窄と小腸絞扼，右卵巣転移を認めた．現在，外来通院加療中である．大腸癌の脾転移症例は稀有であり，その文献考察を加えて，1例報告する．

32）術後早期に骨転移をきたしたびまん浸潤型直腸癌の1例

富田　広・山崎　俊幸
斉藤　英俊・千田　匡
須田　武保・内田　克之
酒井　靖夫・佐藤　信昭
畠山　勝義　（新潟大学第一外科）

大腸癌はびまん浸潤型癌はまれであり，その予後は極めて不良である．術後早期に骨転移，骨髄転移をきたしたびまん浸潤型直腸癌の1例を報告し，過去の症例を含め，21例について検討した．びまん浸潤型の頻度は0.6％であった．性別は男：女＝12：9，平均年齢は64.8歳であった．組織学的にみると，高分化腺癌3，中分化腺癌3，低分化腺癌10，印環細胞癌5例であり，全例 ss あるいは a_1 以上の深達度を示した．開腹所見では19例中13例が Stage Ⅳ以上であり，そのうち8例が非治癒切除に終わった．予後は21例中19例が原病死していた．特に低分化腺癌，印環細胞癌では進行例が多く，1年以内に全例死亡し，極めて予後不良であった．びまん浸潤型を組織型から分化型癌と未分化型癌の2つに分類したところ，この分類法は臨床および組織学的特徴と対応しており，実際の臨床面でも十分有用と考えられた．

33）当院における大腸癌肝転移の手術成績

尾池　文隆・宗岡　克樹
高木健太郎・長谷川正樹
真部　一彦・小山　高宣（新潟県立中央病院外科）

当院で最近6年間に経験した大腸癌肝転移切除症例（25例）を対象に手術成績を検討した．原発は，結腸癌15例，直腸癌10例．同時性が15例，異時性が10例で，異時性における初回大腸手術からの期間は平均24ケ月であった．転移巣数は1個13例，2個5例，3個以上7例で，H1 が17例，H2 以上が8例であった．術式は，部分切除8例，亜区域－区域切除11例，肝葉切除7例であった．死亡例の再発形式は，残肝再発10例，肺転移3例，骨転移2例，局所再発2例，腹膜播種1例，皮膚転移1例であった．結果は5年生存率12％で，同時性のものと異時性のものに生存率の有意差無く，H1 と H2 では H1 の方が予後がよかった．今回得られた生存率は充分とはいえず，術中 echo 等による転移巣検索の徹底，適応の再検討，術式の追求などが必要と思われた．また異時性肝転移の非切除例には発見が早ければ切除可能となったものもあると思われ，大腸癌手術後の綿密な follow up が重要であると考えられた．

34）大腸癌の肝転移に対する治療成績

筒井　光広・佐々木寿英
加藤　清・佐野　宗明
梨本　篤・土屋　嘉昭
牧野　春彦・千田　匡
岡田　貴幸・小林　浩司
南村　哲司（新潟県立がんセンター外科）

当科における1982年から10年間の大腸癌手術例は866例で肝転移を認めた症例は143例であった．同時性肝転移102例，異時性肝転移41例に対して各々肝切除が26例，14例行われ，5生率は31.4％，58.4％であり，肝切除後再発率は73.1％，35.7％であった．再発例のうち肝単独再発は径 20 mm 以下の多発例で原発巣が高分化型癌のものに多かった．多臓器再発は異時性転移例や腫瘍径の大きいものに多く，これらは動注化療に加えて全身補助化療の適応と考えられた．肝切除後再発の治療で切除が行われたのは4例で肝切除3回，肺切除2回であった．再発巣切除後の生存期間は8ケ月～16ケ月であるが3例が生存中であり，TAE 等の他の治療法に比して延命効果が期待できた．

35）保存的に加療し得た上腸間膜動脈閉塞症の1例

真部　一彦・尾池　文隆
長谷川正樹・高木健太郎
山崎　信保・小山　高宣（新潟県立中央病院外科）
畠山　重秋（同　内科）
関　裕史（同　放射線科）

急性上腸管膜動脈閉塞症は急激な経過をとり，不幸な転帰をとることが多い．今回われわれは，発症後約3時間で確診し，保存的に加療して救命し得た1例を経験したので報告する．症例は59歳男性．既往歴：平成2年10月 RIND にて当院脳外科入院．この時 Af を指摘され，以来治療を継続していた．現症：平成4年2月2日 Speech disturbance にて当院脳外科入院．RIND の診断で加療．退院予定であった．平成4年2月10日朝食後より心窩部痛を訴え，各種鎮痛剤を使用しても軽快しないとして紹介された．上腹部に軽度の筋性防御認め，既往歴などから上腸間膜血管の閉塞を考えた．緊急 CT と Angio で SMA 血栓症と診断．直ちに SMA よりウロキナーゼの投与を行った結果，SMA の再開通が認められ，自

覚症状も軽快した．経口摂取も7日目から開始し，以後腹痛なく退院した．血栓症が起こり得る基礎疾患を持った症例の腹痛は本疾患を常に念頭において加療するべきと考えられた．

36）虫垂炎は気圧に影響を受けるか

福田　稔・川島　吉人（県立坂町病院外科）

平成3年2月より平成4年8月迄，虫垂炎の発生時期と気圧の関係を調べてみた．

虫垂炎は気圧が 1,020 mb 以下に多く発生している事が明らかになった．又同時にイレウスや十二指腸潰瘍穿孔も同様である事が分かった．

又四季を通じて虫垂炎の発生に変化があるか否かを調べて発表する．

37）当科における腹腔鏡下手術の現況
—胆摘を除く—

川合　千尋・内田　克之（日本歯科大学新潟歯学部外科）
鈴木　茂・吉田　奎介
富山　武美（新潟大学第一外科）
植木　秀功（亀田第一病院外科）

当科では1991年10月1日より腹腔鏡下胆嚢摘出術を開始し，その後，手技の安定と共に胆摘以外にも腹腔鏡下手術の適応を拡大している．現在までの腹腔鏡下手術症例は66例であり，胆嚢摘出術以外の手術の内下記4術式につき報告する．① 胆嚢摘出術＋経胆嚢管的総胆管結石摘出術：胆嚢管をバルーンカテーテルで拡張の後，細径胆道鏡を挿入．バスケットカテーテルで結石を摘出．胆嚢管は通常通りクリッピングした．② 虫垂切除術：3本のトロッカーで入り，虫垂間膜および虫垂根部を endo-GIA で処理し虫垂を摘出した．③ 鼠径ヘルニア修復術：Prolene mesh を用いヘルニア門を腹腔側から閉鎖した（preperitoneal mesh repair）．④ 胃粘膜下腫瘍摘出術：腹腔鏡と胃内視鏡で腫瘍の位置を確認．腫瘍直上で小開腹し摘出した．

その他腹腔鏡下手術は様々な手術に適応可能であり，今後さらに症例を積み重ね適応を広げていきたいと考えている．

38）腹部外傷手術例の検討

齊藤　六温・二瓶　幸栄
吉田　正弘・関矢　忠愛（刈羽郡総合病院外科）
植木　光衛

過去8年間に開腹手術を行った外傷例は，男21例，女5例の計26例であり，年令は19才から89才（平均47.7才）であった．外傷の原因は交通事故16例（運転中11例）労災5例，鈍的暴力2例，刺創3例（自傷2例）であり，交通事故の2例，労災の1例，刺創の1例の計4例が死亡した．

年令分布では交通事故運転中で20才代と60才代が多かった．

初診時100％に腹痛を認めたが，初診時のショック状態は，腹膜炎12.5％，出血30.0％であり，腹膜炎＋出血が83.3％と高値であった．

入院から手術迄の時間をみると腹膜炎では外科初診と他科初診で明らかに前者が短時間であったが，出血では，有意差はなかった．この事は，重症外傷例では1科の医師が診ているだけでは見落しがあるので，可能な限り複数の専門医が診察する必要がある事が明確になった．他に入院期間，予後，死亡例，ならびに興味深い症例を発表する．

39）当院における虚血性心疾患の消化器外科手術の検討

橋本　恭伸・近藤　恒徳
山洞　典正・植木　秀任（立川総合病院外科）
田中　乙雄（新潟大学第一外科）

1987年1月から1991年12月までの過去5年間に，当院で施行された全麻下消化器手術症例958例のうち虚血性心疾患66例（陳旧性心筋梗塞31例，狭心症35例）における消化器外科手術上の問題点を検討した．悪性疾患は52例，このうち手術死亡，入院死亡は8例（15％）と高率であった．これらの背景因子として（1）比較的高齢の症例（2）術前心機能が低下している症例（3）心筋梗塞症例とくに発症後6カ月以内の症例における死亡率が高率であった．また手術に際しては，術前心機能の評価に加え（1）術中出血量の抑制（2）術後の充分な補液による hypovolemia の防止が必要とおもわれた．